

# イスラエル アンベールド Vol.1 「マグダラ」



英語版オリジナル--2016年12月12日公開：

Israel Unveiled Vol.1: Magdala

<https://youtu.be/aAzRIHTusnA>

メッセージby アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

ここは、マグダラです。私の背後にあるのは、ガリラヤ湖のすぐそばにあった、1世紀のユダヤの町の、港の古代遺跡です。ご覧のとおり、ガリラヤ湖の水位は大幅に下がっています。今年、間違いなく干ばつの年です。ここ数年は十分な雨が降らず、ガリラヤ湖の水位は下がっているのです。そこですぐに思い起こされるのは、1986年のこと。二人の兄弟が、何か宝が見つからないかと、ちょうどこの場所、ガリラヤ湖の、マグダラとゲネサレの間のこの湖岸を歩いていました。そしてその日は、彼らのためにあったような一日だったのです。彼らの目は一本のローマの釘に留まりました。もう一本、そしてまたもう一本。それから木片が目に入りました。汚れを落としてみると、それが舟の一部であることが分かりました。そうすると、もう時間との闘いです。彼らは当局や、エル・アル航空、空軍に問い合わせました。何とかして、その驚くべき1世紀の古代木造船を、このガリラヤ湖岸の泥の中から、安全な場所へと運び移すために、助けが必要だったのです。舟をその場所から取り出す方法はただ一つ、舟があった場所からガリラヤ湖まで溝を掘ることでした。水が入って来ると、舟はその湖底の墓場から浮上し、2000年ぶりに、再びガリラヤ湖の同じ水の上を滑ることができたのでした。興味深いことに、私のすぐ背後にあるこの港で、1世紀の漁船がどのようなものであったかを示す、美しいモザイク画が見つかりました。そして発見された舟と、そのモザイク状の床に見られる舟とを比べてみると、ほぼ同一だったのです。それは、考古学者たちにとっても、専門家たちにとっても、それが1世紀の木造船であると断定できた、胸躍る興奮の瞬間でした。ここにも、世界中のどこにも、そのようなものは他には見つかりません。

歴史を遡ると、マグダラは、イエスの時代には、「塔」という意味を持つ“ミグダル”という名で呼ばれていた事が分かります。ここは、ナザレからカペナウムに向かう道中、イエスが最初に差し掛かった町でした。私の後ろにあるのはアルベル山で、アルベル山の向こう側には、イエスがナザレからガリラヤ湖まで歩く際に通られたであろう渓谷があります。ここは、いくつか並んでいたユダヤ人の町の最初のものでした。マグダラ、ゲネサレ、タブハ、カペナウム、コラジン、ベツサイダ。その最初の町がこのミグダル、つまりマグダラでした。

ミグダルという名は「塔」という語から来ています。見張り塔は必要ありませんでしたし、防壁や要塞も不要でした。ここにあった塔は、商業用の塔であった可能性が最も高いと思われます。ガリラヤ湖で捕れた魚が、その塔の割れ目に入れて干されていたと言われています。古代のビーフ・ジャーキーならぬ、フィッシュ・ジャーキーだったんですね。魚の干物は、その当時は珍味で、たいていローマ兵たちが、必要時のエネルギー供給源として好んでポケットに入れておいた、プロテインバーのようなものでした。

ミグダルはユダヤ人の町でした。ユダヤ人は、イエスの時代、ガリラヤ湖周辺にはごく限られた地域にしか住んでいませんでした。ここが確かにユダヤ人の町であったことは、シナゴグの発見によって裏付けられました。それも単なるシナゴグではなく、ガリラヤ湖周辺では唯一発見された、1世紀のシナゴグです。カペナウムやコラジンなど、他の町々で発見されたシナゴグはみな、もっと後の年代のもので、中には3世紀あるいは4～5世紀のものもありますが、イエスの時代のもは他には一つもありません。ここだけなのです。

この土地をどうしてよいか分からずに持て余し、それを売却することにしたユダヤ人男性から買い取ったメキシコのカトリック系組織が、カトリック巡礼者たちのためにホテルを建てようとしたお陰で、偶然にも、1世紀の町の遺跡が見つかったのです。当然、その工事は中止され、直ちに発掘作業が開始されました。シナゴグが見つかり、その隣には市場が見つかりました。住宅地、古い港、そして例の舟のモザイクも見つかりました。ここで発見されたものの中でも、とりわけ興味深い物は、あの四角い石で、それはシナゴグの中心に据えられたメインテーブルであったと思われます。そこで係の者が巻物を開いて、朗読したのです。 私たちには、イエスが一度ならずガリラヤ湖周辺のシナゴグで教えられたことが分かっています。そして、習慣として、イエスは安息日にシナゴグに入られ、聖書を朗読されたことも分かっています。

ここで発見された石は、その4つの側面も、上面も見事に装飾されていました。ということは、それは壁の一部などではなかったということです。イエスご自身がそこに立たれて、その石の上に広げられた巻物から聖書を朗読されたことは間違いありません。その石はユダヤの飾りやシンボルで美しく装飾されていて、その中でもメノラー（つまり七枝燭台）の装飾が発見されたことは何よりも重要であり、ここが間違いなくユダヤ人の町であったことを決定づけました。その後、この町に住んでいた祭司の家に必要であった、儀式用の浴場も見つかりました。ガリラヤ湖沿いのまさにこの場所に、1世紀の重要なユダヤ人の町が存在していたのです。

そのシナゴグの規模がかなり小さいものであったことから、町そのものがそんなに大きなものではなかったことが分かります。通常、男性は毎日のようにシナゴグを訪れ、女性は祝日や安息日にだけ来ていました。シナゴグが小さかったということは、その町があまり大きくなかった事が分かります。そして、小さな町には、うわさ話がつきものです。小さな町に住んでいると、何もかもが誰もかれもに知られがちです。そこで、この町に住んでいた、非常に重要な、ある特別な女性の話をしたいと思います。

その女性の名はミリアム、つまりマリヤで、ルカの福音書第8章では、マグダラのマリヤ（マリヤ・マグダレナ）として知られています。彼女には苗字がありませんでした。彼女の父親が誰であったのかも、母親の名前も分かっています。その当時は、子供が多いのが一般的でしたが、彼女に兄弟や姉妹がいたかどうか不明です。分かっているのは、彼女がマグダラに住んでいたことと、イエスが彼女を癒し、彼女から七つの悪霊を追い出されたということだけです。人間の中に宿る悪霊の存在は、様々な形態で現れることがあります。しかし、一つだけ確かなことは、あなたが悪霊に憑かれていることが人々に知れると、そこではもう傷物と見られてしまうということです。誰もあなたに近づこうとしないし、誰もあなたと関わりを持ちたがりません。マグダラのマリヤは、この町では評判の良い女性ではありませんでした。それだけは確かです。噂話の盛んな小さな町。お喋り好きな小さな町。何もかもが、誰にも彼にも知られています。マリヤにとって、悪霊に憑かれながらそのような小さな町に住み、町の笑いものとされ、のけ者とされ、誰からも望まれない者であることは、確

かに居心地のよいものではなかったはずですが。彼女には、彼女のことを愛し、養い、おそらく彼女が望んでいたであろう子どもを与えることのできる男性がいませんでした。当時、彼女の年頃で結婚しておらず、子供のいない女性は、確かに、問題のある女性でした。私にはマリヤの気持ちが分かります。人生のある時点で、他の人たちから傷物として見られるような経験をしたことのある人は、私たちの中にもあまりにも多くいます。しかし、私たちには、イエスがミグダルの町に来られて、マリヤからすべての悪霊を追い払われたことが分かっています。

マリヤが恐れずに近づくことのできた男性が1人いたのです。彼女は、安心してその人のもとに行くことが出来たのです。それがイエスでした。前にも言いましたが、イエスは誰かを癒すことを拒まれたことは、一度もありませんでした。聖書によると、イエスはガリラヤ中を巡り、シナゴグで教え、あらゆる人々を様々な病や苦痛から癒しておられました。てんかん患者もいれば中風患者、悪霊に憑かれた人たちもいました。間違いなく、マリヤもその1人でした。しかし、イエスに癒された人々のうち、すべてを捨ててイエスに従ったのはごくわずかです。マリヤは、その1人でした。マリヤはルカの福音書第8章で初めて登場します。

「その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅をしておられた。十二弟子もお供をした。また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ、ヘロデの執事クレーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか自分の財産をもって彼らに仕えている大ぜいの女たちもいっしょであった。

(ルカの福音書8:1-3)」

マグダラのマリヤは、十二弟子とともにイエスに従った人たちの1人でした。マグダラのマリヤは、自分の父や母、それにおそらく兄弟姉妹たち、また、確実に故郷の住民たちよりも、イエスと一緒にいる方が安らぐ事が出来たのでした。おもしろいことに、その前の第7章で、イエスはパリサイ人の1人であったシモンと語っています。シモンはイエスを食事に招いていました。イエスは、彼に、ある癒しを受けた女性についての話をされました。47節でイエスはこう言われます。

「だから、わたしは言うのです。『この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。』」(ルカの福音書7:47)」

七つもの悪霊が、マリヤの中から出て来ました。必ずしも彼女が罪を犯したからではありません。それもありませんが、1つ確かなことは、私たちは多く赦されれば、多く愛するということです。七つもの悪霊が、マリヤにイエスを愛させたのです。私は、1世紀を通して、マリヤのようにイエスを愛した人は他に誰もいなかったと思っています。マリヤはどこにでもイエスに従っていました。イエスと弟子たちが行った所はどこにでも、マリヤも行きました。彼女はイエスを先生と呼び、師と呼び、そして主と呼びました。イエスはマリヤの主でした。ある人たちが言うような、愛人関係はありませんでした。そういった人たちは、神の愛がどういうものなのかが分からないので、女性の師に対する愛を理解するのが難しいのです。イエスは彼女の主でした。それは、イエスが彼女の人生の中心だったことを意味します。彼女にとって、イエスはすべてだったのです。悪霊に憑かれ、のけ者にされ、拒絶されてきた者が、今、初めて愛され、赦され、受け入れられ、優しく包まれたのです。それも、多く

の人たちに師、主、教師、ラビ、救い主、全国民の救い主として称えられる人物によって。それは、彼女にとって大変な光栄でした。

皆さんにも、十字架にかかれたイエスを見た時のマリヤの受けたショックが、どれほどだったか想像できるでしょう。彼女の人生が砕け散ったのです。彼女の夢も、彼女の希望も砕け散ったのです。すべてが崩れ去りました。イエスが死んでしまったとは、彼女には信じがたいことでした。イエスは彼女にとってすべてだったのです。イエスの為に、彼女は朝起き上がって、その日を生きて、また眠りにつきました。彼女は、自分の人生に希望があることを知っていました。自分の人生に赦しがあることを知っていました。自分の人生に愛があることを知っていました。彼女は自分には生きる理由があることを知っていました。ヨハネの福音書20章にある記述は、主、また師としてのイエスに対するマリヤの愛と献身を、最もよく表していると思います。ヨハネの福音書20章をお読みします。

「さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。  
(ヨハネの福音書20:1)」

マリヤは朝早く、まだ暗いうちに墓に行きました。彼女はイエスの親類だったわけでもありません。彼女はイエスの母や兄弟であったわけではなく、一番弟子であったわけでもありません。しかし、朝早く墓に現れたのは、彼女1人でした。日曜日の朝、まだ暗いうちに。彼女は暗やみを恐れませんでした。強盗や誰かに襲われることも恐れませんでした。彼女には、そのような不安や、ローマ兵に警備されているはずの場所に早朝に来ることをためらわせるような物事などは、少しも気になりませんでした。

「…朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。『だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。』

(ヨハネの福音書20:1 - 2)」

マリヤの声に込められた懸念と深い情熱が聞き取れますか。イエスの復活について受けた啓示が気になっていたのではありません。彼女は復活について、それがどういうものなのかをよく理解していませんでした。マリヤにとって大事だったのは、イエスの体が、死者としてでも、大切に扱われることでした。大事に、しかるべき場所に安置され、適切な処理がなされるように。

「そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中にはいらなかった。シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓にはいり、亜麻布が置いてあって、イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。そのとき、先に墓についたもうひとりの弟子もはいつて来た。そして、見て、信じた。彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。(ヨハネの福音書20:3-9)」

イエスは、ご自身がよみがえらなければならないことを、彼らに伝えていました。イエスは、ピリポ・カイザリヤで、ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです」と告白した直後に、人の子は殺され、よみがえらなければならないと告げておられました。しかし、それは十分に理解されませんでした。心に残らなかったのです。空になった墓を見ても、まだ彼らにはピンと来ませんでした。彼らにとってはまだ不可解な出来事だったのです。それからどうなったでしょう。

「それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。(ヨハネの福音書20:10)」

彼らは空っぽの墓を見ました。イエスは、いません。そこで彼らは、背を向けて自分たちの家に帰ったのです。これは、ペテロとヨハネです。12弟子の中でも、上に立つ弟子たちです。でもマリヤは違っていました。マリヤは背を向けはしませんでした。マリヤはそれを受け入れようとはしませんでした。彼女はどんな答えも受け入れようとはしませんでした。マリヤは、イエスがどこにいるのか分からないままに、空の墓を放っておきはしませんでした。彼女は背を向けて家に帰ったりはしません。聖書にはこう記されています。

「しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。すると、ふたりの御使いが、イエスのからだがおかれていた場所に、ひとり頭のところ、ひとり足のところ、白い衣をまとってすわっているのが見えた。彼らは彼女に言った。『なぜ泣いているのですか。』彼女は言った。『だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。』(ヨハネの福音書20:11-13)」

マリヤは2人の御使いの姿を見たのです。彼らはイエスの体があるはずの場所に座っていました。けれど、マリヤはそこで止まって「まあ、御使いが見えるわ。何て美しい光景かしら」と考えたりしませんでした。彼女には、一体全体どこにイエスの体が置かれているのか、ということしか考えられませんでした。彼女は、2人の御使いにまでも、その不安を口にしたのでした。彼らが御使いたちであったことは明らかでした。マリヤは、ペテロとヨハネと共にそこにいました。他には誰もいませんでした。彼女は墓が空であることを、その目で見ていました。他には誰もいませんでした。彼らがそこを去ろうとした時に、彼女がかがむと、突然、御使いが見えたのです。マリヤは御使いたちを見ても、感動しませんでした。イエスの体がないことが、彼女の心に重くのしかかっていたのです。

「彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。(ヨハネの福音書20:14)」

誰かが死んでしまったと分かっていたら、私たちは、その人がすぐそばに立っているとは思いませんね。誰かがそばに立っているのに気付いても、それが、自分たちの探している死んだ人物だとは、まず思わないでしょう。

「イエスは彼女に言われた。『なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。』(ヨハネの福音書20:15)」

マリヤはあまりにも動揺し、気が動転していたので、

「彼女は、それを園の管理人だと思って言った。

『あなたが、あの方を運んだのであれば、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。』(ヨハネの福音書20:15)」

マリヤは、1人きりでイエスの体を取りに行き、引き取り、イエスが死者として葬られるべき墓に連れ戻そうと申し出たのでした。何という献身ぶりでしょう。彼女はとてもひたむきに、イエスの体が一体どこにあるのかを、探し出そうとしていました。あまりにも夢中だったので、イエスに話しかけられたのに、それがイエスだと気づかないほどでした。では、その続きです。

「イエスは彼女に言われた。『マリヤ。』(ヨハネの福音書20:16)」

その一言で十分でした。

イエスはそれ以外には何も言う必要はありませんでした。イエスの声で名前を呼ばれるだけで十分でした。聖書には、イエスが「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。(ヨハネの福音書10:27)」と言われたことが記されています。マリヤはただちにイエスの声を聞き分けました。

「彼女は振り向いて、ヘブル語で、『ラボニ(すなわち、先生)。』とイエスに言った。イエスは彼女に言われた。『わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行き、彼らに「わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。」と告げなさい。』マグダラのマリヤは、行って、『私は主にお目にかかりました。』と言ひ、また、主が彼女にこれらのことを話されると弟子たちに告げた。

(ヨハネの福音書20:15-18)」

イエスが、復活の主として最初にご自身を現されたのは、ペテロでもヨハネでもなく、カトリック教会が聖母とし共贖者とするイエスの母マリヤでもなく、マグダラのマリヤだったのです。それは、私たちに多くのことを教えてくれます。

イエスは、あなたの社会的地位には目を向けられません。あなたの銀行口座も、成功談も考慮されません。イエスにとって大切なのは、ただ、あなたの献身とあなたの愛だけ、そして、あなたの人生において、ご自身がどれほど主とされているかということだけです。イエスは、マリヤにとって全てでした。

マグダラは1つの町でした。マグダラのマリヤは、この町の物語です。今日、マグダラ(ミグダル)のことを誰もが知っているのは、マリヤのためです。彼女は何者でもありませんでした。彼女は誰からも愛されず、誰からも関心を持たれませんでした。彼女は見捨てられていたのです。傷物だったのです。彼女は拒絶されていました。しかし、イエスに対する彼女の愛と献身のために、今日、誰もがマグダラという町を知っているのです。彼女は、私たちがこの町のことをもっと知りたいと願う理由となりました。彼女は、私たちがイエスのことをもっと知りたいと願うきっかけとなったのです。

私たちが何者かになるためには、イエスが私たちの人生のすべてになるように、私たちが自らを無とするだけでよいとは、なんと美しいことでしょう。マリヤは、決して自分に優れ

たところがあるとは考えませんでした。彼女は、いつもイエスを主として認めていました。私たちもまた、マリヤのように献身的に主を愛し、主の御声に敏感でありますように。そして、私たちの罪が許されていることを憶え、それゆえに多くの愛を持って、イエスを私たちの主として生きることができるよう。